


さちひろ

天理教狭千廣分教会の広報紙
1面・みんなの教理入門(3)
2面・幸せを届ける言葉
3面・連載・おさしづの点滴
4面・教会の動き・編集後記

発行：天理教狭千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 Tel.072-365-2571

E-mail:wat@sachihiro.com url:http://sachihiro.com 編集兼発行人・山口 渡



信仰の初まりを振り返ってみると、どうして入信したかということは、みなそれぞれ人によって違いがあり、様々である。様々であるが、いま仮にこれを分類して、三つに分けてみる事ができる。

第一は、自分がたすかったから信仰し初めたという場合である。

この場合には、病気(「身上」みじょうという)をたすけられた場合と、病気以外の何か困ったこと(「事情」という)を解決してもらった場合がある。また、たすけてくれた人は、布教師の場合もあり、教会の会長や信者の場合もある。そういった人の導きによって入信する。

第二は、夫婦・親子・兄弟などが、一方の者がたすかったので、他方も信仰し初めたという場合である。さしたる関係もない人がたすかったのを、たまたま居合わせて見ていたために信仰に入ることもある。

第三は、信者の家庭に生まれ育った子供の場合

で、もの心つくころから、あるいは生まれながらにして信仰している者がほとんどである。もつともそのような場合でも、年頃(ころ)になって、みずから特別な体験をして「信仰をつかんだ」というようなことも起きるであろう。

このような、信者の子供の場合には、信仰に導いてくれた人はいないようにみえるが、信仰をしている人、教理を実践している人がまわりにいるので、その人たちの生活、特に人々がたすけられる事実をみて、知らず知らず信仰に導かれているわけである。

以上三種類に分けてみると、最も基本的なもの第一の場合で、たすけられて入信するということが帰着する。

この場合、「身上」や「事情」の悩みをもつ人が、たすかりたいと思って神様にすがり、神様によつてたすけられたということであるが、その神様とは、もちろん親神様である。

「みんなの教理入門」連載・3 心のめざめ 《てびき》

天理大学名誉教授・芹澤 茂

天理教の教えを、天理教学の泰斗・芹澤茂先生がわかりやすく説明します

教会の動き

- 朝づとめ…毎朝・6時30分
 - 夕づとめ…毎夕・7時00分
 - 春季大祭…1月21日午後1時30分
 - 秋季大祭…10月21日午後1時30分
 - 月次祭…毎月21日 午後1時30分
 - 春・秋季霊祭…3月22日・9月22日 午後1時30分
- ※教会の場所は、左の地図の📍マーク。市立公民館の裏・西側です。



■久々に小学校で雅楽を演奏
今年度は、雅楽演奏の依頼がなくて、なして終わりそうでしたが、最後に一件だけありました。

大阪狭山市立南第二小学校です。音楽担当の先生が、むかしわが家の子供たちはじめ、わたしも卒業した地元小学校・西小学校におられたときからのお付き合いで、毎年、演奏を行っています。



伶人服姿がわたしです。校長先生の姿も…

プログラムは、ほぼ例年通りなのですが、新しいものを一曲(「千の風になつて」)だけ入れました。

《編集後記》

▼「落ち着かない日々」と前号に書きましたが、ようやく末女の高校受験も終わって、ほっと一安心している昨今です。みなさんはどうですか。▼「さちひろ」第24号をお届けします。内容は、前号と代わり映えしません。▼先月9日、大雪が降ったあの日、前から予定していたので、無事到着できるのか不安な思いに駆られながら、熊野に出かけました。安全のため、遠回りですが阪和道・和歌山経由で行きました。5時間半くらいかかりましたが、なんとか無事到着、翌日の青年会総会に間に合いました。▼その他、日々の話題を綴るプログラムもご覧ください。
<http://sachihiro.com>「#やまさんのブログ」から入れます。

さちひろ 第24号

編集兼発行人・山口 渡
平成20年3月8日
大阪狭山市今熊1丁目1133番地
Tel.072-365-2571

そしてこのとき、親神様のお話として、まず最初に聞く話が「ほこり（埃）の話」「いんねん（因縁）の話」である。「病（やまい）のもととは心から」と教えられることである。（これは身上の場合も事情の場合も同様である。）「病のもととは心にある」と言われるのは、その人が天理に逆らうような心づかいをしているため、「こわい・あぶない」境遇に陥ることをみかねて、人間の親である親神様が「身上」（病氣）や「事情」（災難）によってその心づかい（ほこりやいんねん）と行く末を警告して下さるということである。

このお話を聞いて反省し、「ああ悪かった」と、さんげ（さんげ）の心ははたらくとき、ふしぎな感動が起きてきて、「もう何もいらぬ、神様だけあればよい」と、物も財産も地位も名誉も、あらゆる欲（よく）を手ばなしで、神にもたれる喜びを実感する。

そのときの喜びは、今迄に経験したことのない、純粹で清浄で、しかもあたたかい喜びである。

このとき心は、ほこりにまみれ、いんねんにしばられていたところから抜け出して、親神様の世界、陽気ぐらしの世界にめざめるのである。

これが入信ということであり、信仰の出发点である。（親神様は、ひとりの人を入信させるために、身上事情や導く人、その他の機縁など、すべてお膳（ぜん）立てをされ、をのようにして、親神様が人々の心にみずから現わされてお手引き下さるのである。）

信仰は親神様のてびきに初まるということとは、誰（だれ）でも知っていることであるが、信仰を反省する上で最も大事な点である。

（せりざわ しげる）



高橋美津志「ちよつとひとこと」

（善本社刊）から

幸せを届ける言葉

まじ心の言葉

先日、友人からこんな話を聞いた。

世の中を気持ちよく暮らしていくには、忘れてはならない言葉が三つある。

「させていただく」という奉仕の言葉
「ありがとう」という感謝の言葉
「ごめんなさい」というさんげの言葉

この、まご心の言葉を

口先だけの言葉にする人が、たいへん多いようだが、

「させていただく」

「ありがとう」

「ごめんなさい」

の言葉が自分の本心から出た、うそいつわりのない本音でなければ、明るい暮らしは生まれてこないよ、と。

おさしづの点滴 (3)

風は神や。風がかりもの無うては、箱に物を入れて蓋を閉め切りた如く、腐ろうより仕様の無いもの。風がそよくあるので、半日や一日は送れるで。（20・3・22）

【解説】

このおさしづの最初に「放つて置け」とあります。何に対して言われたものなのかわかりません。「刻限御話」ですが、対人関係でのトラブルが背景にあるようです。「誰彼を仇と言わない」と注意をされ、ことばのやりとり（対話）を風にたとえて論されています。

大風は、大きな建造物でも倒壊させ

風がそよくあるので

る力をもっていますが、その働きの源は親神様にあります。「風は神」です。風が吹いて空気が流れます。対話が人とひとの心を交わらせます。もし仮に風がなかったならば、「箱に物を入れて蓋を閉め切るようなもので、中のものが腐ってしまうでしょう。風がそよよとふきます。会話を通して心の交流がなされますから、ものが腐らないように、心も腐らず、日々が送れる、過ごせるのです。

親神様は、風通しをよくすることで、ものが腐らさないように、人とひととのことばのやりとり（人間関係）を通して、心が腐らさないようにしてくださっているのです。人の心は、風（親神様の働き）によって浄化されるのです。おさしづは「風がそよくあるので、半日や一日は送れるで」と風の働きの大切さを論じています。

人間関係の煩わしさから逃れたいような場合もあるかも知れませんが、しかし、この道の信仰者は「里の仙人」

と教えられます。いつも「風がそよく」の心で通りたいものです。

【おさしづ全文】

巻一 明治二十年三月二十二日（陰曆二月

二十八日）二時 刻限御話

さあく放つて置けく。誰彼を仇と言ふのやない。大風々々、大風は何処にあるとも知れんもの。大風というものは、どのよりの大きな物でも、倒れる潰れる。大風やで。風は神や。風がかりもの無うては、箱に物を入れて蓋を閉め切りた如く、腐ろうより仕様の無いもの。風がそよくあるので、半日や一日は送れるで。人の言う事を腹を立てる処では、腹の立てるのは心の澄み切りたとは言わん。心澄み切りたらば、人が何事言うても腹が立たぬ。それが心の澄んだんや。今までに教えたるは腹の立たぬよう、何も心に掛けぬよう、心澄み切る教やで。今までの修理肥で作り上げた米が、百石貰たら、百石だけある間は喰て居る。今度無い世界を始めたる親に凭れて居れば、生涯末代のさづけやで。これは米に論して一寸話して置け。